

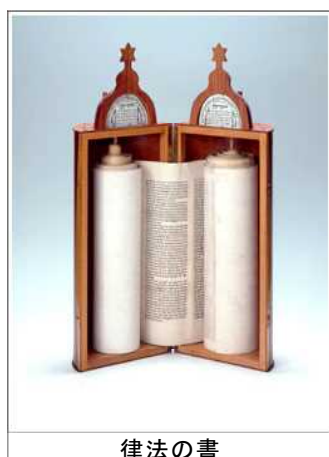
「旧約聖書の完成者イエス」

(マタイ5:17~20)

挽地茂男

2020.2.16 日本基督教団千歳丘教会礼拝

本日は、「山上の説教」の三回目です。今日の箇所は5章17-20節で主イエスは「律法」について語ります。律法はイスラエル民族の精神と文化と歴史を支えている書物です。



律法の書

日本でそれに対応するような書物は何でしょうか。ちょっと思い当たりませんが、あえて言えば、本居宣長の国学のバイブルは古事記と

日本書紀と万葉集ですが、精神と文化に対する密着度と影響力では旧約律法にはまったく及ばないのですが、古事記を日本精神との関係でとりあげて、その神髄についてお話しするというような場合を例にしてみると、多少話が分かりやすいかも知れません。主イエスは「律法」について語り、その神髄を明らかにしようとしているのです。

さて主イエスは、自分は律法を完成させるために来た、“律法の

完成者”として来たのだと語ります。17節。「マタイ5:17 わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。」完成するというのは、主イエスは、より厳しくビシビシと律法の規則を守ることを要求するために来られたのでしょうか。次回〔来週は総会ですので山上の説教は1回お休みしますが、その次の日曜日に〕読む箇所にはこんなことが書いてあります。マタイ5章38-39節。「マタイ5:38 「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。5:39 しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。」こんなこと出来るわけがない、と思ってしまう。ですから「律法を完成する」と言われても、実は余りいいことがおきないような気がしてしまいます。

しかしその時に、まず、わたしたちには思い出さなければならないことがあります。先週申しましたように「山上の説教」の中心には主の祈りが置かれている、ということ

です。「教え」は「祈り」とペアで考えなければなりません。「教えと祈り」の関係が重要です。教えや掟を実行する力は——主イエスの見ればよく分かりますが——「祈り」から来るのです。そしてわたしたちが「祈る」のは、神さまが「恵み」ふかい方であり、祈りに応えてくださる方であることを信じているからです。ですから、**教えが厳しければ厳しいほど、恵みの神の心(真意)をたずね求めて祈りは深くなり、祈りが深ければ深いほど神の御心に達しようとする理想は低くならず、高くなるのです。恵みがわたしたちの願いと、実践への意志を支えます。その時、わたしたちは神さまの求めの大きさに応じて、より大きな恵みを味わうのです。恵みに導かれ支えられるのでなければ、理想は単なる達成感と功績に墮落するのです。**

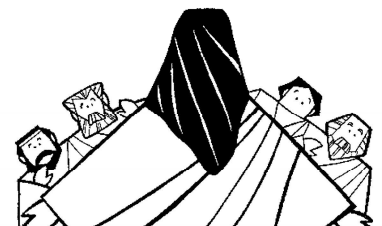


先週、「山上の説教」が三つで一つという「三つ組みのパターン」を特徴としていることをお知らせしました。「山上の説教」全体が、

図表1 山上の説教の構造

	マタイ福音書	並行記事
導入部 説教の状況設定	4:23-25/ 5:1-2	マコ 1:39、3:7-13 ルカ 6:12、17-20a
I. 三つの宣言——弟子たちを終末論的共同体として形成するために 5:3-16		
A 「幸い」の教え:弟子の品性と運命	5:3-12	ルカ6:20b-23 (24-26)
B 「地の塩」である弟子	5:13	ルカ 14:34-35 マコ 9:49-50
C 「世の光」また「山の上の町」である弟子	5:14-16	ルカ 8:16、11:33 マコ 4:21
II. 三部からなる教え——終末論的共同体における生活様式について 5:17-7:12		
A 第一部「律法(と預言者)」(神の民の義) 5:17-48		
1 律法と預言者の完成／律法学者やファリサイ派の人々の義に「より優る義」	5:17-20	ルカ 16:16-17
2 「より優る義」を具体的に示す 三つの反対命題 (律法の根源化) 5:21-32		
a. 殺すな (怒り)	5:21-26	ルカ 12:57-59 マコ 11:25
b. 姦淫するな (色欲)	5:27-30	マコ 9:43
c. 離縁状を渡せ (姦通)	5:31-32	ルカ 16:18 マコ 10:3-4、11:12
3 弟子であるための三つの反対命題 5:33-48		
a. 偽りの誓いを立てるな (言葉の誠実)	5:33-37	M
b. 目には目を (復讐の放棄)	5:38-42	ルカ6:29-30
c. 隣人を愛し、敵を憎め (愛敵)	5:43-48	ルカ6:27-28、32-36
B 第二部「心からの敬虔」(神の民の敬虔) 神の御前での三つの義しい行為 6:1-18		
1 施し (名譽欲・見せびらかしを捨てて)	6:1-4	M
2 祈り (眞の祈りを目指して) 6:5-15		
a. 偽善者や異邦人の祈り (見せる敬虔・偽善)	6:5-8	M
b. 主の祈り (眞の祈り)	6:9-13	ルカ 11:2-4
c. 赦し (赦す者は赦される)	6:14-15	マコ 11:25 (-26)
3 断食 (隠れたことを見ておられる父の前で)	6:16-18	M
C 第三部「慈しみの行為」(神の民の日常的行為) 社会的関係と行動において神を信頼し神に仕える ——眞の義についての補足的な教え 6:19-7:12		
1 神に仕えるか富に仕えるか (神への誠実)	6:19-24	ルカ 12:33-34 11:34-36 16:13
2 思い煩うな 神への信頼——神の国を第一に求めよ	6:25-34	ルカ 12:22-32
3 人を載くな (正しい自他の評価)	7:1-5	ルカ6:37-42 マコ 4:24-25
4 神聖なものを犬に与えるな (正しい価値観)	7:6	M
5 求めることと受けること (神への依存関係)	7:7-11	ルカ 11:9-13
6 結びの要約: 黄金律 (人にしてもらいたいと思うことを人にせよ) = これこそ律法と預言者	7:12	ルカ6:31
III. 三つの終末論的警告 7:13-27		
A 二つの道	7:13-14	ルカ 13:23-24
B 二種類の果実 (偽預言者)	7:15-23	ルカ6:43-46
C 二人の家造り	7:24-27	ルカ6:47-49
説教の結び	7:28-29	マコ 1:22

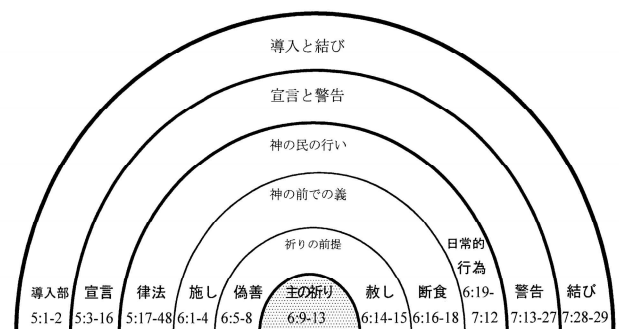
M. Eugene Boring, *The Gospel of Matthew*, NIB vol.viii, Nashville, TN: Abingdon Press, 1995, p.173.



大きく「宣言」(5:3-16)と「教え」(5:17-7:12)と「警告」(7:13-27)という三つの部分からできあがっています。そしてさらにこの「宣言」「教え」「警告」のそれぞれがまた三つ組みで構成されているのです。「宣言」のもとに「あなた方は幸いである」という宣言と「あなた方は地の塩である」という宣言と、「あなたがたは世の光である」という3つの宣言が置かれます。これらの「幸い」と「塩」と「光」の宣言の部分は先々週と先週読み終えました。今日から「教え」の本体に入っていきます。この教えの本体にあたる5章17節－7章12節も、さらに三部構成になっています。①第一部が「律法(と預言者)」について語る5章17－48節。②第二部が、施しや祈りや断食などの「祭儀(神の前での義[しい行為])」について語る6章1－18節。③第三部が「慈しみ(の行為)」について語る6章19節－7章12節。「律法」と「祭儀」と「慈しみ」の三部構成です。3つで1つの三つ組み構造は山上の説教の特徴です。

今日は三つ組み構造とともに、もう一つ山上の説教に特徴的な構

造をお知らせします。それは先ほど申しました「主の祈り」を中心にして成り立っている構造です——先週は簡単に触れました。ふつう〈囲い込み構造〉(inclusio インクルーシオ)と呼ばれる構造です。先ほどの5章17節の言葉を、もう一度読んでみましょう。「5:17 わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っ**て**はならない。廃止するためではなく、完成**する**ためである。」そして7章12節を読んでみましょう。「7:12 **だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。**」「律法と預言者」という言葉が対応しています〔「律法と預言者」という表現は旧約聖書全体を指して使う当時の慣用的表現〕。5章17節と7章12節はこの「**律法と預言者**」という同種のテーマでその内側(5:18-7:11)を〈囲い込む〉構造になっている



図表2 山上の説教の「囲い込み構造」

のです。そしてその中心に「主の祈り」があるのです。実は山上の説教の教えは、この中心から外へと〈囲い込む〉構造になっているのです。「主の祈り」を中心にして外側へと、同種のテーマで囲い込んでいきます。ですから断面が玉ねぎを切ったときのような断面になっているのです。としますとテーマとしては、中心のテーマが最重要なのです。つまり「主の祈り」、「祈り」が山上の説教(教え)の中心なのです。マタイという優



れた教師は、この「主の祈り」を徹底的に重視して、これを理解させ、この「祈り」に導こうとして主イエスの教えをまとめたのです。「主の祈り」こそ主イエスの教えのエッセンス

だと考えているのです。先週紹介したマタイ研究の第一人者の言葉をもう一度思い出しましょう。こうでした。「**山上の説教は、その中心(6:9-13〔主の祈り〕)において、行為する人間を神に祈るように導く。山上の説教の実践がその中心においては祈りであることを見落とす解釈は、マタイの意味では誤解である**」(L. ルツ『EKK 新約聖書註解I/1 マタイによる福音書(1-7章)』教文館、1990年、267頁)。

今日は5章17-20節を読んでいます。次回(再来週)読みます5章21-48節との関係も少し見ておきましょう。実はマタイは、つぎに続く5章21-48節の「律法」についての教えの前置きとして、今日の17-20節をここに置いているのです。5章21-48節は——小難しい用語で——「反対命題集」と呼ばれます。先ほど読みました5章38-39節がそ

反対命題集

(1) 殺すな(怒り)	5:21-26	ルカ12:57-59 マコ11:25
(2) 姦淫するな(色欲)	5:27-30	マコ9:43
(3) 離縁状を渡せ(姦通)	5:31-32	ルカ16:18 マコ10:3-4、11:12
(4) 偽りの誓いを立てるな(言葉の誠実)	5:33-37	M
(5) 目には目を(復讐の放棄)	5:38-42	ルカ6:29-30
(6) 隣人を愛し、敵を憎め(愛敵)	5:43-48	ルカ6:27-28、32-36

の反対命題の1つです「マタ5:38



「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。5:39 しかし、わたしは言ってお

く。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。」実は反対命題も三つ組みのパターン、三段階で展開するパターンになっているのです。主イエスはまず第一段階、①「目には目を、歯には歯を」と旧約聖書を引用して、つぎに第二段階、②「しかし、わたしは言っておく」とことわりを入れて、報復を正当と見なす旧約聖書の言葉に反対するかのようになり、「悪人に手向かってはならない」と語り、そして第三段階、③「だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」と具体的な指示を与えます。この①旧約聖書を引用し、②「しかし、わたしは言っておく」とことわりを入れて、旧約聖書の言葉に反対するかのようない主張をし、最後に③具体的な指示を与えるという教

えのパターンを「反対命題」と呼ぶのです。律法に反対しているかのような印象を与えるので、「反対命題」と呼ばれます——「反対命題」は簡単に言ってしまえば、律法に反対するように見える主イエスの「教え」（お話）ということです。5章21－48節の「律法」についての教えの部分には、6つの反対命題が出てきます〔三が2つ、三と三で6、まとめて「反対命題集」と呼びます〕。この6つの反対命題の一般原則が今日の箇所ですつまり5章17－20節で説明されているのです。こうして**律法とキリストの弟子であることの関係が明確にされていきます。**

では主イエスが「律法（と預言者）を完成する」と言うとき、それは何を意味しているのでしょうか。主イエスはまず18節で「**律法の文字から一点一画も消え去ることはない**」と聖書の永遠的有効性を主張します。ですから「反対



命題」は律法に反対しているように見えても、律法を廃止するものではないのです。主イエスは律法を「**廃止するためではなく、完成するため**」に来られたのです。「反対命題」は律法の完成として読まなければならない。「完成」は「未完成」を前提としています。主イエスは、律法に関する現状を「未完成」と見ているのです。ファリサイ派の人々や律法学者が躍起になって律法を守ろうとしている現状すら、未完成と見ているのです。そしてこの「未完成」を「完成」に至らせるために「**わたしが来た**」(v. 17)と言われるのです。

「**完成する**」と翻訳されている言葉(プレーロオー)は、「成就する」が直訳で、マタイの「成就の神学」——マタイは「成就」のカテゴリーを他の福音書より多く使う——を反映しています。「成就」というのは、①律法が要求する掟をすべて「実行」することではありません。また「成就」というのは、②律法の意味に関する新しい「解釈」を提出することを意味しているのでもありません。そしてまた「成就」というのは、③主イエスの教えが、

律法を正しく「要約」しているということでもないのです。「成就」というのは、単なる律法の「実行」でも「解釈」でも「要約」でもありません。「成就」というのは、その〈本質〉を現実のものにすること、具体化することであり、歴史化することであり、もっと言えば、人格化すること——血も涙もある生き活きと生きる人間の現実の姿として〈生命〉を与えること——なのです。神は人がよりよく生きるために律法を授けられました。成就とは、神が律法を人間に与えられた「思い」を現実のものにすることなのです。

以前ヨハネ福音書を学んだときにマザー・テレサの言葉を取り上げました〔男子の会の例会の標語にしています〕。こんな言葉です。

「思い(思考 your thoughts)に気をつけなさい、それはいつか言葉になるから。言葉に気をつけなさい、それはいつか行動になるから。」



行動に気をつけなさい、それはいつか習慣になるから。習慣に気をつけなさい、それはいつか性格になるから。性格に気をつけなさい、それはいつか運命になるから。」最初の思いは究極的には運命につながります。神の思いは、究極的には主イエスの運命につながりました。主イエスの十字架は神の「思い」の現れです。律法も神の「思い」の現れです。人は律法から、細かいさまざまな規則を作り出し、人を縛るものに変えてしまったのです(マタイ15:1-20参照)。「律法」を成就すること、それは神が与えた律法の〈本質〉的な〈メッセージ〉と〈生命〉を解放することなのです。つまり神の〈思い〉を取り戻すことにあるのです。

そのために主イエスは「わたしは来た」(エールテン)と言われるのです。イエス・キリストの到来から救いの歴史(救済史)が始まりました。そして主イエスの生涯を通して完成(成就)されていく救いの歴史の中に律法を組み込むのです。また「成就」することは、同時に未完成な現状を超えていくこと、つまりある種の「超越」を含むことを意味します。現在あるも

のをイエス・キリストは超えています。12章6-8節でこう語ります。「12:6 言うておくが、神殿よりも偉大なものがここにある。12:7 もし、『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』という言葉の意味を知ていれば、あなたたちは罪もない人たちをとがめなかったであろう。12:8 人の子は安息日の主なのである。」主イエスは、現行の宗教制度を超えた人格的な存在であり、冷ややかな宗教システムを超える豊かな「憐れみ」の化身であり、律法の文言を人格化することによって血の通ったものとして再提示するのです。そこには、**憐れみと正義と愛と契約的忠誠が生きているのです**。「反対命題」は律法の根源、神の思いへと立ち返って、律法を完成するのです。

この5章17節の言葉は、「**律法の完成者**」としてのイエスを前面



に立てることによって、5章17節—7章12節におよぶ山上の説教の「教え」を導入する表題として機能しています。さてそれに続く、18—19節です。「5:18 はっきり言っておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない。5:19 だから、こ



トラー（律法）

れらの最も小さな掟を一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国

で最も小さい者と呼ばれる。しかし、それを守り、そうするように教える者は、天の国で大いなる者と呼ばれる。」

主イエスは「はっきり言っておく」(v.18)ときりだして—ユダヤ教のラビと同じく(アボット〔父祖たち〕2:1、3:18、4:21)—律法の「小さな」掟でさえ重要であると主張します。「はっきり言っておく」は直訳すると、「アーメン言っておく」です。主イエスは「アーメン」を言葉の最初につけて、大切なメッセージを伝えます。「アーメン」から語り出され

る言葉はマタイで32回、マルコで13回、ルカで6回、ヨハネ25回（アーメン、アーメン）出てきます。マタイが一番多いのです。マタイは主イエスの言葉に権威を置いているのです。このアーメンは、ヘブライ語の〈アーメーン〉の音写で、言われたことに「まことに」とか「そのとおり」という肯定の応答を示す、通常、語られた言葉や文章の終わりに来る言葉です。主イエスは、これを言葉の最初に置きます。主イエスご自身の権威ある教えの独自の側面を示しています。

「一点一画」の一点とは、ヘブライ語アルファベットの最小文字、(ヨッド)にあたり、一画は「角」や「角のように突き出た物」を意味し、ヘブライ語の𐤀(カフ)と比べた𐤁(ベト)の(右隅の)角を指しています。主イエスは、こんな小さな字画でさえ消え去ることはない、と聖書の永遠



的有効性を主張します。

また律法の重要性が、最も小さな掟に対するこだわりとして表現されます。「だから、これらの最も小さな掟を一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。しかし、それを守り、そうするように教える者は、天の国で大いなる者と呼ばれる」(v. 19)。ここには律法を捨てていくヘレニズム化(ギリシア化)した人々が視野にあると言われます。マタイの時代には「律法」は廃止されるべきものだと言う人たちがいたのです。それはパウロ〈信仰義認〉を誤解して、人は信仰によって救われるのだから、もはや律法には存在の理由がない、と主張する人たちです。確かに、パウロは律法から自由な福音を説きましたが、しかしパウロは律法を無にしませんでした。むしろ信仰によって律法が確立されると説いているのです。主イエスの「律法の完成」とパウロの「律法の確立」を比較するために、パウロが〈信仰義認〉を宣言しているローマの信徒への手紙 3 章 21 - 31 節を見ておきましょう。ここに出てくる「神の義」という言

葉は、①神の正しさ、正義というだけでなく、



く、②神との正しい関係とか、③その関係の回復という意味を持ちます。ではロマ書。「3:21 ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。3:22 すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。3:23 人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、3:24 ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。3:25 神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。3:26 このように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。3:27 では、人の誇りはどこにあるのか。

それは取り除かれました。どんな



法則によってか。行いの法則によるのか。そうではない。信仰の法則によってです。3:28 なぜなら、わたしたちは、

人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです。3:29 それとも、神はユダヤ人だけの神でしょうか。異邦人の神でもないのですか。そうです。異邦人の神でもあります。3:30 実に、神は唯一だからです。この神は、割礼のある者を信仰のゆえに義とし、割礼のない者をも信仰によって義としてくださるのです。3:31 それでは、わたしたちは信仰によって、律法を無にするのか。決してそうではない。むしろ、律法を確立するのです。」

十字架には神の正しさと愛が交差しています。神は正しいがゆえに、律法に違反する罪(人)を裁かなければなりません。しかし同時に神は愛なのです。その愛のゆえに、神はご自分の御子を罪人の代

わりに十字架で裁かれたのです。ですから十字架の救いを信じる人は、神の愛を信じると同時に、御子に裁きを下した神の正しさを認めるのです。その神の正しさの基準を律法が示します。十字架は、律法にもこめられた、また主イエスの死に込められた神の「思い」を凝縮しているのです。だから、信仰によるこの救いは、律法を無にするのではなく、むしろ律法を確立するのです。

山上の説教の中心に祈りがあることはすでに見ました。律法の言葉の正しい理解も祈りの中から、主イエスとの交わり [= 祈り] の中から得られるのです。祈りは神の思いに近づくことでもあるからです。人となった言(受肉)によって、神の言葉である律法は、人格化し、律法の細部へのこだわりや、本当の意味の細やかさは、主





イエスとの人格的な交わりのなかで確認されます。このようにして得られる行動の正しさ、すなわち〈義〉が律法学者やファリサイ派の人々の〈義〉に勝っているのは当然です。20節。「5:20 言うておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない。」律法学者やファリサイ派の人々には、ユダヤの伝統継承者としての自負がありました。主イエスはこの伝統にあぐらをかいているあり方を強く批判するのです。高い水準の敬虔と宗教的実践は彼らのものでしたが、主イエス(マタイ)は彼らを典型的な偽善者と考えているのです(23:1-33参照)。それは神の思いから遠く離れた、見せるための宗教、本質のないパフォーマンスとしての宗教に過ぎないからです。しかしこの山上の説教が弟子たち(読者)を招いている義しい生活の水準は、単に偽善を避けるというものではありません。今日

の箇所が続く6つの反対命題(21-48節)は、律法学者やファリサイ人の義を超えるということが何を意味するのかということの詳細に説明します。

イエス・キリストが与える救いは、わたしたちを神さまの「思い」へと導きます。それは罪多き者が、いまだに神さまに愛されていることを教えます。神さまを父と呼ぶに値しないものが、父なる神の恵みと交わりの回復を経験するのです。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。

独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ3:16)。これはわたしたちの価値



を測る、唯一の正しい物差しです。わたしたちは「神が愛する存在」なのです。たといわたしたちの心が「そうじゃない」と大声で叫んだとしても、そうなのです。

主イエスの登場は、イザヤが預言したとおりでした。「イザヤ9:1 闇の中を歩む民は、大いなる光を見／死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。」この光に照ら

され、その愛に暖められる経験から、恵みと祈り（神さまとの交わり=宗教的根源）の経験から、律法の理解、神の思いを記した「律法」の真の理解は出てくるのです。またそこから出てくる宗教的实践こそが、律法学者やファリサイ派の人々「よりまさる義」を可能にするのです。

祈りつつ歩んでまいりましょう。祈りから行動へ、行動から祈りへ。共に歩んでくださる神さまの恵みを、もっともっと体験しましょう。そのことによって益々神の恵みを証しすることができますように。

新しい1週間の歩みのために祈りましょう。

2020.2.16 日本基督教団千歳丘教会礼拝

